

笑い声

登場人物

田村 悟

田村 良子

田村 五月

志水 速男

厨房の人

宿泊客たち

町の若い男たち

映画監督

映画の出演者たち

女子高校生

男子高校生

その他

1

簡易宿泊施設。ロビーと食堂が一体化しているような場所。

朝食をとる数人の客。

田村悟と良子。やや、距離をおいて五月。

悟「モラルの問題を言ってるわけで、人を笑いものにすることをいいとか悪いとか言ってわけじゃない。……いや、道徳的には、悪いんだけど。状況によって、いろいろあるから。とにかく……笑いものにす
るっていうことがどういうことかは、ここでは問わないとしてもだよ。現にこうして、笑い声も録音さ
れているわけだし」

悟、スマホを示す。

悟「……聞いてみる？」

スマホから、笑い声が再生される。

悟「これは、五月ちゃんの声だ」

良子「詩を読んでもるのは、誰。五月じゃないでしょ」

悟「もう一人、いたんだ。その子が詩を読んで、それで、二人で笑ったんだ」

悟、スマホを操作し、再び、笑い声。

悟「ほら、この声、笑ってる。これ、五月ちゃんでしょ」

五月「……はい」

良子「モラルって、なんなの」

悟「モラルっていうのは、ものの道理っていうか。ま、礼儀みたいなものだよ」

良子「誰と一緒にだったの」

五月「……」

良子「五月」

悟「友達じゃないかな。学校の。若い女の子だった」

良子「そうなの？」

五月「……」

良子「なんか言いなさいよ」

五月「……」

良子「なんで笑ったりしたのよ」

五月、鼻で笑う。

良子「なにがおかしいのよ。そうじゃないでしょ。今は、どうして、あのとき、笑ったのかってことを聞いてるんでしょ。なんで、今、笑うのよ。」

悟「いや、だから、たいしたことじゃないんだ。ちょっと変わった書き方をしたところもあるし、詩っていうのは、普通の言葉で出来上がっているものではないわけだし。私は、それを専門に書いて来た人間でもないよ。でも、一人の人間が、なにかを、なんとか言葉にして、表現したものを、笑っていいということにはならない。それは、まあ、恥ずかしい、幼稚な言い回しになってたりしたかもしれないさ。だって、詩を書き始めて、一年とたってないから」

良子「……誰でも読めるんだから」

悟「うん？」

良子「ブログって、誰でも読めるんでしょ。不特定多数の大勢の人の中には、笑う人だっているわ」

悟「もちろん、いろんな感想はあるよ。それと、人の作品を読んで、そこで大声出して笑ったことは違うじゃないか。それが、モラルに反するって言ってるんだよ、おれは」

良子「五月、早く、あやまりなさい」

五月、悟の前に来て、立つ。

悟「いや、まあ、いいんだけど。……そんな、大したことじゃないから」

五月「……」

良子「お父さん、ごめんなさい、って」

悟「お父さんは、まあ、無理に言わなくていいけど」

五月「……ごめんなさい」

良子「ほら、握手して」

悟と五月、握手する。

五月「……それ消してください」

悟「え」

五月「録音した、私の声を消してください」

悟「声って、笑い声だよ」

五月「笑い声も私の声です」

悟「わかった。消しとくよ」

五月「今すぐに、消してください」

悟、仕方なくスマホを操作するが。

悟「今、ちょっと、どうしたらいいかわからないから、あとでやっどくよ」

五月、何も言わず、去る。

厨房の人が来て、

厨房の人「明日、バイトが一人休みなんで、朝食の配膳だけ、お願いします」

厨房の人、去る。

良子「録音するのは、モラルに反しないの」

悟「うしろめたい気もする」

良子「悟さんから、五月が距離を置こうとするのも、わからないでもない」

悟「それは、なにが原因なのかな」

良子「私が言わなくっても、あなた、自分でわかってるでしょ」

悟「どういう意味だよ」

良子「私にそれ言わせてどうするのよ。そういうこと表に出すのは全部私ってことでしょ。で、こじらせて、お昼の時間は過ぎて行く。なんにもならない。なんにも生まれない。あつという間に時間がたって、夜。一日が終る」

志水速男が来て、

志水「良子さん、今日の夕飯はなんですか」

良子「あ、カレーライスです」

志水「そうですか、じゃ、今日は帰って食べようかな」

志水、出かけて行く。

良子「……悟さんの詩、私も読んだわ」

悟「え。あ、そう」

良子「うん。読んだ」

悟「……どうだった？」

良子「私、なんて言うか。詩って、わからないから。……わからないけど」

悟「メールが来たんだ。いくつか反響が、ないわけではない」

良子「でも、これだけは言える。なんか、決定的にまずいなって思った」

悟「え」

良子「まずいのよ」

悟「まずい。……なにが」

良子「なにがって、決定的に」

悟「いや、だから、なにがまずいんだよ」

良子「頼まれもしないのに、書いているから、かな」

悟「言葉は、人に頼まれて、書くものじゃないだろ」

良子「そうなの？」

悟「そうだよ」

良子「もう、やめましょう」

悟「内容のほうはどうなんだ」

良子「だって、あなたが、言えって言うから。……なにかを言う。そして、否定される」

悟「言葉の使いかた、とかさ」

良子「だから、それはよくわからない。……どうして、ここで、こういう場所に書いてあるのを、私、読んでものかなって。……そういうことが気になってしまった」

悟「パソコンの画面で読んだのがいけないんだよ」

良子「そうかな」

残っていた客が、「ごちそうさま」と、出て行く。

良子「いってらっしゃい」

悟「プリントアウトして、紙に印刷したのを、持って来るよ」

良子「……うん」

悟「今、持って来る。全部じゃないよ。ひとつかふたつ、ね、ちょっと、待ってて。……読んで、救われたって言う人が、何人もいるんだよ」

悟、去る。

良子、残される。

2

簡易宿泊施設。夕方。

フロントらしきところに良子。宿泊客、来て名前を告げる。

良子「こちらに、名前と住所と電話番号を書いてください」

宿泊客、書く。鍵をもらって去る。

志水が食堂から来て、良子を見ている。良子も志水を見返す。

別の宿泊客が使っていたマッサージチェアが空く。志水、それにすわって気持ちがいい。

フロントに、また別の宿泊客が来て、鍵を置いて行く。

良子「11時には施錠します」

良子、志水の使うマッサージチェアへ。

良子「……五月が出てるっていう映画を観に行つて来て欲しいんだけど」

志水「映画？」

良子「私、ここ動けないから」

志水「どうしておれが」

良子「なんか、知り合いの大学生に出てって言われたらしくて、今日が試写会なんだって。どんな映画かわかんないけど。そんなことはいいのよ。だって、映画を観に行くんじゃないもの。五月を観に行つて欲しいから。……見たって、言うだけで、あの子、喜ぶと思うわ」

志水「……なんで、おれが行くんだよ。旦那さんが行けばいいだろ」

良子「だから、……あの人じゃだめなの」

志水「なんで」

良子「……また飲みに行っちゃつて。」

良子「……五月はあなたに見てもらいたいのよ」

宿泊客、来る。

良子「お食事ですか。……食堂は8時半ラストオーダーです」

客「コンビニ、近くにありますか？」

良子「通り渡つてすぐです」

客、去る。

3

居酒屋。

田村悟と町の若い男たち。

悟「ああ。いいつて。自分でやるから」

男「悟さん。のみすぎですよ」

悟「うるさい」

皆、悟の酒量に困惑している。

男たちの会話

「大丈夫かな」

「ストレスだよ。酒も飲むさ。奥さんに男ができたらしいから」

「宿泊客だろ。除染の」

「その奥さんには高校生の娘もいるらしいぞ」

「親から受け継いだ旅館が荒れ果てたままじゃな」

「観光で来る客なんていないから」

悟「おい。どんどん飲め、勘定はおれが払うから」

男たちの会話

「……莫大な借金があるんだろ」

「その奥さん、それ知らないで結婚したのかな」

「言わないだろ、そんなことわざわざ」

4

試写会の会場。客席に、五月。

やがて、志水が来て、座る。

以下は、上映されている映画の内容。

「女スパイ危機一髪」

伝染病が蔓延している世界。

月夜の晩に、海から侵入するテロリストたち。彼らは、原子力施設からプルトニウムを盗み出そうとする。

プルトニウムの在処を示した地図を携えて、浜辺で待つ女スパイ。

彼女は、実は警察の特殊部隊の一員で、密かにテロリストグループに潜入し彼らを浜辺におびき寄せたのである。3人のテロリストが、女スパイから地図を受け取る。

テロリスト、地図を破る。と、女はテロリストからナイフで刺される。彼女の素性はばれていたのだ。

くずれ落ちる、女。

それをきっかけに、特殊部隊とテロリストの銃撃戦。

テロリストは次々に撃たれ、一掃される。

その間に五月、志水のそばにすわり、耳元にささやく。

五月「……あの、黒いビニール袋に入れて、警察の特殊部隊から見つからないようにして、原子力施設に侵入をくわだてようとして、失敗するのが私」

志水「へえ。……どれ？」

五月「もうすぐ、撃たれるわ」

五月、志水の肩にしなだれかかる。

映画のラストシーンは以下の通り。

女スパイは、上司の特殊部隊の男に抱きかかえられる。その上司の男は女スパイのことを愛していた。

上司「どうしてこんなことに」

女スパイ「……あなたの写真を上着のポケットに入れておいたのがばれちゃった。」

上司「だから、なんでそんなことに」

女スパイ「上着を、上着を」

上司「上着がどうした」

女スパイ「持ってなかったの、井上さんが」

上司「誰だ、井上って」

女スパイ「ううっ」

上司「おい。おい。誰なんだ、その井上ってやつは。この計画を立案したリーダーか」

女スパイ「ああ。ううっ」

上司「おい！誰なんだ」

女スパイ「さ、さ、寒がりな……同志。女の子よ」

上司「……そうか。じゃ、ぼくは、せめて、きみの面影をここに刻むよ」

女スパイ「もうおそい。もうおそいわ」

女スパイ、微笑みながら、こと切れる。

エンドロール。

と、会場の明かりがつく。

志水、五月から監督を紹介される。

五月「こちらは、この映画の監督をした、桜庭さん」

志水「こんにちは」

監督「こんにちは」

五月「この人は、ママの恋人」

志水「……志水です」

監督「……どうでした、映画」

志水「……面白かったです」

監督「そうですか。ありがとうございます」

5

街なか広場。

帰宅する人々。ギターの練習をしている高校生のカップル。

酔った悟が来る。煙草を吸おうとするが、火がないので、通りがかりの人に火をもらう。

悟「おい。向こうでやれ、向こうで」

高校生カップルは仕方なく、移動。悟、舞台の上に立つ。

悟「……ええ。……ああ、ああ、ああ。……なんて、マイク、テストテスト。……はははは。ああ、ええ、ああ……ご通行中のみなさん。……、ええっと、みなさんは、少し、我慢すれば、なんとか、やっ
ていけるのです。こんなことじゃ、いかん、こんなことはしてはいけない、でも、ま、ちょっと、恥ず
かしいことでも、……気にかかることも、見ないようにすれば、なんとか、なります。……ちょっとの
我慢です。……昨日まで。だって、みんな、やってることなんですから、なにをそんなに、ちょっと、
もう、ほんのちょっと目をつむれば、ちゃんと、生きていきます。……ああ、ああ。テストテスト。…
…、ちょっとです。ほんのちょっと、これくらい。……あと、少し、ほんの、少し、……ちょっと、の、
こと、なんです。あれ、ほら、マイクない。マイクなんか、ないよ。はははは。」

悟は、高校生カップルの自転車に乗る。

高校生「あ」

男子高校生が、それを阻止する。悟は、男子高校生を押し倒し、自転車で逃走する。

6

阿武隈川の支流、荒川にかかる橋。信夫橋。

自転車を押して歩く、悟。途中で立ち止まる。自転車を離す。自転車は欄干に倒れかかる。

ポケットから紙に印刷した自作の詩を出して、それを読む。

悟「カネタタキ。かたたたきではない。たたかれるほどに肩幅がないから。カネタタキは意外にも小さなからだで、きんきんきんきんきん、と大きな声で鳴く小さな虫だ。おばあさんの肩をたたいてあげるのうれしいことだが、そのおばあさんは、今年の春に死んでしまった。それにもまして、かたたたきして、住み込みの薄井さんにも辞めてもらった。きんきんきんきんきん。とんとんとんとんとん。カネタタキとかたたたき。どうか、カネのなりますように。カネのなりますように」

7

宿泊施設。志水の宿泊する部屋。シャワーを浴びて、濡れた髪を拭く志水。

と、ノックの音。良子。

志水「……はい」

良子、入って来て、ラジオのスイッチをいれる。軽快な音楽。

それに合わせて、踊る良子。志水を挑発するように。

抱き合う二人。

良子「さっき、知り合いから電話があった。悟さんが、橋の上を自転車で渡ってるの見たって。荒川にかかる橋。橋の真ん中で止まって、ぼーっとしてたので、悟さんが自殺でもするんじゃないかと心配になって知らせてくれたのね。私は、あの人、へべれけに酔ってるんなら、いっそ落ちないかな、そしたら、保険金はあるかもしれないのに、とか思ったんだけど。……そうじゃないのよ、きっと。……あの人、ただ、橋の上から、新幹線が通るのを眺めているんだと思う。ちょうどあそこからは、新幹線がよく見える。まるで未来の大きな都市みたいに、ビルとビルの間の高いところを、流星のように走って行くのが」

性行為に及ぶ。

五月が来る。

五月「お母さん」

良子「はい」

五月「苦情が来た。6号室のテレビの音量が大きいんだって」

良子「あ、そう」

五月「わかりましたって、言ったけど」

良子「そう」

良子「なに」

五月「一応、報告に」

良子「ありがとう」

五月「お父さん、まだ帰ってこないけど」

良子「お父さんなんて、いつもは言わないのに」

五月「言えるときは、来る、とってた。それが今だった」

良子「本人に言わないでどうするの」

五月「だって、それは無理。……志水さん、質問があります。今日の映画の私の演技、どうでした」

良子「ね、五月。おかしいでしょ。そんなことを聞くタイミングじゃないでしょ。部屋に戻りなさい」

五月「どうだったの」

志水「とてもよかったよ」

五月「私ね、テロリストの側にもそれなりの理由があると思う。監督さんはまるで悪者あつかいだっただけ、そう単純な話じゃないと思う。ね、なにがよかったの。私の演技のなにがいいの」

志水「なにがって」

五月「よかったって、私、黒い袋に入ってごろごろしてたその他大勢の役だったわけだけ。それのどこがいいんですか」

志水「……うーん」

良子「そういうことを話すときって、映画観たあとでしょ。なんで今なの」

五月「私は世界の幸福のことを考えた。今、ここには、それがないと思うから。幸福。そうね、私たちの幸福ってことから始めてもいい。……私たちっていうのは、私とお母さんのことよ。だからと言って、私にはどうすればいいのかわからない。お母さんと別れて、この町を出てやり直すには私はまだ若すぎる。……でも、私たちが幸福でなければ、世界のことなんて考えられないのに、私は弱くて、毎日、ただ生きていくのでやっとな。……ただ、これだけは言える、私はお母さんのように男に頼って生きていくたくはない。……それだけね、それだけが確かに私にはわかった。……おやすみなさい」

五月、去る。

良子「どうして、私がここにいるってわかったのかしら」

志水「わかるんじゃないの、そういうことって」

良子「そうなの。……どうして」

志水「混乱しているというより、むしろ、明快な解答を得たという感じだった。一つの人生の教訓、男には頼らない。五月さんは、あの歳で重い覚悟を背負ったんだよ」

良子「私のことを不潔だと思えば、当然よ」

志水「明日、ここを出るよ。いわきで仕事があるんだ」

良子「そう」

良子「……静かね」

志水「でも、テレビの音が、聞こえるよ。……確かに、あれじゃ迷惑だよ」

良子「6号室でしょ。……部屋に籠もりっきりでひまをもてあましてるのね。お金もないし……」

志水「ふーん」

良子「……テレビの音、大きくしたらね、それが合図ですよって、私、教えてあげたのよ。もしも私が廊下を通ったら、そーっと、中に入って、手でしてあげるって。……そのかわり、目を閉じて、私を見ちゃ駄目、声も出しちゃ駄目。」

テレビの音。笑い声。

志水「バラエティーだね」

良子「うん？」

志水「テレビ」

良子「ああ」

志水「あんなに、笑えることがあるんだな」

良子「……あれは、きっと待ってるのね。……私の手」

テレビの笑い声、ふたたび。